

最終講義

私の国際経済学・現代世界経済論研究を振り返って

2007年1月17日

朝 日 稔
(関 下 稔)

最終講義の機会を与えていただき、関係各位に深く感謝いたします。これまで多くの先生方の最終講義に立ち会ってきましたが、自分がその立場になってみて、誠にあっけないというか、特別なことのないというか、意外な感じです。というのは、さぞかし感慨ひとしおのものがあるのではとか、あるいは感涙に咽んで言葉が出ないのでは、などと勝手な想像をめぐらしていましたが、しかしそうしたことは私にはやはり無縁だったようで、淡々と日頃の講義の一コマを行うという感じです。というのは、私はこれが生涯の最後の講義になるとは考えておらず、今後は場所を変えてさらに研究も教育も続けていこうと思っているからです。とはいえ、折角の機会ですので、これまでの研究生活を概観してみたいと思いますが、過ぎしてきた人生の一端にも触れざるをえないので、皆さんには少々退屈で、表題とは無縁なところへも寄り道することをご容赦下さい。

いうまでもなく、大学の存在意義は真理を探究し、真実を語ることです。したがって、学生諸君に語るときには襟を正し、自分が真理だと確証できるもの、あるいは少なくともそう信じていることを率直に話すべきで、疑わしいこと、不確かなこと、わからないことはその旨いつて、諸説を紹介するか、自分の考えを留保しておけばよいと思っています。そうでなければ、学生と教師との間の人間的な交流も信頼も、そして何よりも真理愛好精神（フィロソフィ）も育まれないと固く信じているからです。ですから、これから話すことは、自分自身を素材にしなければならないという特異な形をとりますので、出来るだけ客観的に冷静に話そうとは思いますが、そこに多少の誇張やあるいはその反対の過少化があっても割り引いてご理解いただき、いつもの講義と同じく、正確な判断は皆さん方自身に委ねたいと思います。

1. 生い立ち

私は昭和17（1942）年2月25日に埼玉県入間郡東金子村に生まれたということになっています。というのは、正確なところがわからず、誰も教えてくれなかったからです。母親（実は後に養母であることがわかりましたが）は2月22日生まれだと私にいい、経歴書にもずっとそのとおりに書いてきましたが、戸籍と照合する必要があった折、その間違いを手ひどく指摘されました。運転免許を取りに行ったとき、係官に「自分の生年月日ぐらい正確に覚えておけ」と怒鳴られました。それで自身のことをあまりに知らなさすぎたことに思い至った訳です。のっけからミステリアスな出だしですが、私は生涯に三度、姓が変わりました。最初は「豊泉」、そして幼くして里子に出されて「関下」へ、さらに妻の実家である「朝日」へ養子縁組によって改姓しました。したがって私は姓名には頓着していませんし、誇るべき出自、家系も、自慢すべき学歴も、「幼少より神童の誉れ高い」といった評判がたったこともありません。いたって平凡で目立たない存在でした。というよりも、学校の成績という点でいえば、むしろ劣等生といった方がよいかも知れません。

さて、その後何十年かして、兄弟、姉妹との再会を果たすことになりますが、私は4人兄弟の4番目で、私が生まれて半年後に母親は私を背中におぶったまま息絶えていたのを日が暮れて畑から帰ってきた家族一同が見つけた、電気もつけない暗闇の中で泣き叫んでいる私の声を聞きつけて、あわてて母親の背中から私を抱き上げたそうです。したがって、私は実の母親の記憶が全くありません。乳飲み子を抱えて父親は苦勞したそうですが、何せ、父親は4男6女の兄弟の総領で、しかも戦時中のことと大変な状況だったようです。最初は親戚に里子に出されたのですが、うまくいかず、そのうち子供のいない（実はすでに養子を取っていたのですが、その養子が出征してしまったので、代わりを探していた）関下夫婦の養子になったわけです。父親の記憶も私にはありませんが、父親は後に一度だけ私を見かけたそうで、それは実母の実家の誰かが亡くなったときに、私も養母に連れられて葬式に出たそうで、その席で父親が見かけて「稔、久しぶりだな」といったら、養母があわてて私を隠してそそくさと姿を消したそうで、「子供をやるではなかった」と実父が悔やんだとこのことを兄弟の誰かから聞きました。しかし私は父親を恨んだことはありません。むしろその英断に感謝しているといったら、言い過ぎでしょうか。というのは、私のすぐ上の姉は栄養失調で終戦を待たずに亡くなったそうで、私も実家にいたらそうなるもおかしくなかったでしょう。戦後になって父親はこれまた子連れれの女性と再婚し、その間に子供が3人できたので、私は実家では7人兄弟の4番目ということになります。ついでにいうと、一番下の妹はフランスに渡って、フランス人と結婚して、2人の男の子をもうけましたが、脳腫瘍で亡くなっています。だから、私の血筋にはフランス人の甥がいることになります。そんなわけで、私の血のつながった兄弟は今、4人が存命です。

そして戦後の生活は悲惨を極めたそうです。元々江戸時代から続いた、この辺一帯の生糸と茶（狭山茶といって、静岡茶、宇治茶、八女茶と並んで全国的に有名な茶の銘柄地です）を栽培し、仲介する有力者だったそうで、ちょうもと（町元あるいは長元とでも書くのでしょうか）と呼ばれていたそうです。来歴はともかく、戦後は土地改革の荒波をもろに受けて、悲惨きわまりない生活だったそうです。おおかたの土地は取り上げられ、小作人もなくなって茶畑も一家で直接に管理しなければならず、それでは食っていけないので、一家総出でそれこそ月明かりを頼りに耕すといった、赤貧洗うがごとき様だったようです。そして我が家の没落を加速させたのは、茶の商売を拡張しようとして手形詐欺にあって、大損をしたことです。これは戦後間もなくのことで、新聞にも載ったほどの事件だったそうです。その結果、月明かりで耕すという悲惨な状態に陥ったわけです。父親は後に我が家は三度にわたって没落の過程を歩んできたといっていたそうです。一度目は幕末の開港期に大量の外国産生糸が入るようになって、生糸相場が暴落したこと、二度目は戦後の農地改革によって、多くの土地を没収されたこと、そして三度目は手形詐欺です。こんなことを考えると、つくづく運のない、また時流を見通せない、世渡り下手な一家だったような気がします。そんなことですから、継母との折り合いが悪かったこともあって、兄や姉たちは学校もろくろく出ないうちから働きに行くといった有様で、早くから独立せざるを得なかったようです。そうすると、私が里子に出されたのは、結果的かも知れませんが、賢明な選択だったかも知れません。なお、再婚後に生まれた妹、弟たちはみんな大学教育を受けていますから、姉や兄たちが家を出て行った後は生活は上向きになったのでしょう。

ところで、私はいろんな名前を名乗ることが好きで、いくつも名前を持っています。俳号は「疎水庵尋水」とつけましたが、これは西園寺公望の「望山尋水」から取りました。もう一つ川柳を作る際には「角野面齋齋」を使っていますが、これは正岡子規から一部借りたものです。また原稿の催促がくるので、アメリカの俳優ハーベイ・カイトルをもじって、Hanbun Caitelleという名前も自宅のパソコンのところに張ってあります。また今年4月から名古屋の大学で経営学を教えることになりましたので、昨年の秋以来、にわか勉強で経営学の勉強をしています。そのノートの裏表紙には、旭山動物園のオランウータンの写真が張ってあります。それはあまりに知的で聡明そうですばらしいので、それにあやかりたいと思ったからで、そこでAsahiutanという名前を作りました。名前ばかりでなく、縁起も担いでいます。世界中の知恵の神や知者のご利益（りやく）を得たくて、まず文殊菩薩を梵語で書いた（実はそうやって売っていたので、それを信じて買って来たものですが）ペンダントがかかっています。次にミネルヴァのフクロウが置いてあります。インドの象の置物もあります。極めつけは諸葛孔明の誡子書の一節「澹泊明志 寧静致遠」の言葉です。これは56才過ぎにカナダから帰ってきからの私の座右の銘になっているので、自己流の翻訳によって全文を紹介しておきましょう。

「無欲でなければ志は立たず、穏やかでなければ道は遠い。学問は静から、才能は学から生まれる。学ぶことで才能は開花する。志がなければ、学問の完成はない。人を見下す気持ちがあっては自分を奮い立たせることが出来ないし、浮わつた気持ちでは本能に流されるだけだ。歳月が去るのは早く、意志が弱いと、老いた後世間に忘れられるだけだ。その時、みすぼらしい境遇を悲しんだところで取り返しがつかうか」というものです。このことを日頃から実践しているわけではありませんが、そうなりたいと願って努力しています。

2. 小学校時代

1948年（昭和23年）4月に小学校に入学しましたが、養家は東京都中野区本郷通りにあり、竹材商から材木商、そして土建屋に成り上がっていった家で、敷地は広く、北後ろ隣にはお寺、東隣には製瓦工場があり、近所一面焼け野原だったということもあって、遊ぶには不自由のない環境で、学校から帰ると、鞆（といっても軍隊の背嚢を修繕したものでしたが）を窓から放り込んで、家に入りもせずそのまま飛び出して行って、遊びに夢中になっていました。家には若い住み込みの若い衆が何人もいて、これまた住み込みの女中さんやらなんやらで、それに養父、養母、そして戦後シベリアの捕虜から引き上げてきた、出征していた義兄（実は養父の末弟なのですが）に私を入れると、12、3人ほどの大所帯で、みんないくつもの部屋で雑魚寝状態でした。もちろん、父も母も朝から晩まで汗水垂らして働いていて、学習環境などは全く整っていません。全くのほったらかしです。そこでこれ幸いとばかりに遊びに励んだわけで、勉強に知恵は出ませんが、遊びのための知恵は湯水のごとく湧き出てきて、あらゆる子供遊びに手を出しました。その腕前を披露することが出来ないのが残念ですが、ベイゴマ、メンコ、ビー玉、おはじき、石蹴り、竹馬、コマ廻し、凧揚げ、釘差し、輪投げ、パチンコ、お手玉、トンボ捕り、金魚すくい、虫取り、チャンバラその他、何でもこいです。紙相撲に凝ったり、野球盤ゲームを作ったりしましたが、そのためのボール紙が欲しくて、選挙のポスターをはがしてもってきてしまい、警察から大目玉を食ったことがあります。父親がPTAの副会長をしていた関係もあって、たまに学校の先生から少しは勉強をするように指導してほしいと小言をいわれると、その時ばかりは帰ってきて「勉強しろ」としかられるのですが、こちらも心得たもので、父兄相談があることがわかると、その晩はさっさと晩飯を食って早めに寝てしまうか、親父がしびれをきらして酒を飲んで酔っぱらうまで家に帰らずにいるかしてごまかしていました。当時の父権というのは絶対的なもので、親父は長火鉢の向こう側に鎮座して、酒を飲みながら小言を言うのですが、酒の勢いもあってか、時によると金属製の火箸で頭をこつんとたたいたりします。食事中にご飯をこぼしたりすると、行儀が悪いといって、これまた火箸でたたく。痛いものですから、よけたりすると、親に反抗するかといって、今度は二度もこつんとや

られるといった有様で、いやはや現在では想像できないくらい、「暴力的」（といっても手を挙げることはなかったですが）で絶対的でした。そういえば、こういうこともありました。男は男らしくしなければならない、たとえ首を切られても泣いてはならないというのが口癖でしたが、「でもとうちゃん、首を切られたら、泣きたくても泣けないよ」と反論すると、屁理屈というなど、これまた火箸でこつんとやられました。

また家には職業柄、材木屋や荷主などの同業者はむろんのこと、大工、とび職、左官、経師屋、瓦屋、ガラス屋、土方、その他雑多な職業の人たちが行き来していて、中には全身彫り物だらけの異様な人たちや、顔に切り傷のある（あるいは小指のない人も見かけたような記憶もあります）人たちがしょっちゅう出入りしていました。自然に大人の、それも猥雑で下品であけすけな世界を知るようになり、その中にどっぷりつかって生活していました。ついでに近所を紹介しますと、道路を挟んだ前はハンコ屋さんで、その隣は戦前は裕福な家だったのですが、戦争で夫と男手を亡くし、女手一人、日雇い労働者をして二人の娘を育てていた、空き地ばかりの中にバラック建ての小屋風の家のあるものでした。これにはちょっとしたエピソードがあって、夫の出征中、しかも母親もそばにいないときに空襲に遭って、幼い娘二人がとっさに近所の防空壕に飛び込もうとしたところ、中はすでに一杯で、入ることを断られたそうです。そこで仕方なく、外の水道の蛇口の下で水を出しっぱなしにして小さくうずくまっていたそうですが、何と、断られた防空壕に爆弾が落ちて、中にいた人はあらかた死んだそうで、水道の下でうずくまっていた幼い姉妹は奇跡的に助かったということです。私の母は「そんな不人情なことをするから天罰があたったんだ」といって、当然だという口ぶりで話していました。

ついでに戦争の話をする、親父は砲兵として徴兵されたのですが、戦地に行く前に国内での訓練中に大砲の下敷きになって肋骨を折り、名誉の負傷ということで除隊になりました。男手が出払ってしまったこともあり、町内会の会長をしていて、自分の家のことは顧みずに町内の防空・防火に奔走していたそうです。そこで空襲警報が鳴ると、母親が私を負ぶって防空壕に逃げるわけですが、我が家にも小さなものがあり、比較的軽度の時にはそこに入りますが、水がいつも張ってあって、冷たい印象がいつまでも私の脳裏に残っています。それよりも忘れられないのは、大空襲の際、母親がかなり離れた崖に横穴をつけた防空壕に避難する途中、転んでしまい、沢山の荷物をもち、私を背負っているものですから、容易に立ち上がれません。そこで「誰か起こして下さい」と叫ぶのですが、誰も自分のことで精一杯で助けてくれません。ようやくのこと、防空壕にたどり着いて、中で席を取ってほっとするかしないかして、「泥棒」と母親が叫びました。財布を盗まれたのです。こんな緊急の時に財布を盗むのですから、ひどいものです。もちろん、財布はすぐには見つからず、後になって、外のどこかに中身を抜き取って捨ててあったそうです。この二つのことは私の脳裏深くいつまでも鮮明に残っていました。今はもう忘れてしまったようにも思えます。幼い日の特別なことへの印象の深さは私の戦争体

験として克明に残っていて、自分の記憶力はたいしたものだと長い間思ってきましたが、さて本当にそうだったのか。あるいは母親が折に触れてそのことをいうのを聞いていて、いつの間にか自分の実体験に基づく記憶のように勝手に解釈していたのかも知れません。なお、大空襲の後、焼け跡の壊れていた材木置き場（林場といいますが）を整理していたところ、いい匂いがするので掘ったら、埋めておいたお米が地熱でいい具合に炊きあがっていたというので、近所中にふるまったら大いに感謝されたという、嘘のような本当の話もあります。

さてそこで、周囲のところにもまた戻ると、そのまた隣はペンキ屋さんで、そこにも大勢の職人が住み込んでいました。一方、我が家の一角が空いていたので、100メートルほど北の川向こうにあった遊郭兼待合（これを二業地と呼んでいましたが、何と何の二業なのかよくわかりませんでした）の芸者置屋の放蕩息子が当時に珍しく、英文科の大卒者だったので、英語力を利用して進駐軍の通訳などをしていましたが、それで貯めた小金を元手に金貸し業（無尽という仲間組織の形を使って）を始めていて、その店舗（といってもバラックでしたが）に貸していました。そこには派手な化粧をしてブラウス、スカート、ハイヒール姿のモダンな（当時はアプレゲールといっていました）若い女性が電話番と帳付けをしていましたが、そのバラックの前には、およそ周囲とは不似合いな派手な外車が停めてあって、羽振りがいいときには相当なものでした。もっとも没落するの速く、あっという間に店を畳んで逐電してしまいました。風の噂では女優のマネージャーになったとかで、芸者置屋の息子ですから、若い女性を扱うのは手慣れたもんなのでしょう。その金満家の家で、はじめてテレビを見たときのことは今でも鮮明に覚えています。それで、力道山のプロレスや白井義男のボクシングがあると、この家に見せてもらいに行きましたが、白粉の匂いと化粧道具ときらびやかな着物とカツラが鏡台に散乱する甘美な雰囲気の中で、おおよそそれとは違う殺伐とした男の格闘をみるのですから、何ともへんてこりんなものです。そういえば、近所には後にバンタム級の日本チャンピオンになったボクサーが住んでいて、うちの親父がお金の面倒をみたりしていたこともあって、時々遊びに来たりしていて、東洋選手権に挑戦したときには、そこのおじさんに連れられて両国国技館（当時は進駐軍に占領されていて、名称は違ってはいたはずですが）に初めて生のボクシングの試合を見に行きました。結果は善戦及ばず、フィリピンのチャンピオンに負けてしまい、それが境目で、その後そのボクサーは落ち目になっていきます。チャンピオンベルトを失い、連戦連敗で、最後にはKOされて、ボクサーをやめました。何せ長年にわたってパンチをもらい続けたので、すっかりパンチドランカーになってしまい、寝小便はたれるわ、よだれは出すわ、手は痺れるわ、言語不明瞭になるはで、半分廃人になっていたそうです。それに追い打ちをかけたのは、ボクサーをやめて生活が出来ないというので、日頃鍛えた脚力を生かして競輪選手に転向したのですが、今度はレース中に転倒して頭を打ってしまい、更に症状が悪化したのは当然で、その後どうなったかは知りません。

やくざといえば、新宿の女親分というのがいて、その女親分が子分を2-3人連れて我が家に時たまくるのですが、その中の1人の用心棒がどういう訳か、私に愛嬌を振りまいてくれて、すっかり気に入ったらしく盛んに話しかけたり、土産を持ってきたりしました。なんでも良家の坊ちゃんが身を持ち崩したそうで、外見は色白の優男風なんですけど、何かの拍子に背中を見せてくれて驚いたんですが、十センチ以上の切り傷を縫った痕があり、また数センチのへこんだ部分がありました。前者は自転車のチェーンをヤスリで尖らせて、まるで鎖がまか鞭のようにして振り回されて打たれた痕だそうで、中には傷が複雑すぎて縫うのが難しいものもあるそうです。後者はドスで突かれたもので、何ともすさまじい代物でした。用心棒ですから、暴力沙汰は日常茶飯事で、別荘と称する刑務所には何度も入っていたようです（つまり前科何犯かだったということでしょう）。こんな人々が子供の目には優しいお兄さんなので、悪い人だとか、社会のくずだとかといった印象は持ったことはありませんでした。なお、我が家は警察とも懇意にしている、これまたしょっちゅう出入りしていました。これには訳があって、材木商が儲かって、現金を沢山持っていたもので、それには比較的近くにあった東大付属高校を国有財産の処分として、買ってくれないかという話があったくらいで、相当な額だったと思います。残念なことに、土地なんか持っていたって何にもならないと親父はすげなく断ったそうで、全く先見の明のない人間です。買ってあげば、その後土地長者になって左うちわで過ごせたかも知れません。当時は土地持ちということを意識する人はあまりなかったらしく、我が家の店舗を兼ねた広い土地は全て戦前からの借地でした。それで、年始になると、親父は私を連れて、その時ばかりはちゃんと着物を着て、風呂敷に包んだ一升もって、近くの地主の家を尋ねていきます。けっして玄関からは入らず、裏木戸をくぐって、勝手口にまわります。そして、出てきた奥方に挨拶した後、私の方を振り向いて、持ってきた一升を差し出すようにいいます（まさか地代を酒一升で済ませていたわけではないでしょうが）。そうすると、その奥方が「お利口さん」とかなんとかいいつつ、「はいお年玉」と紙に包んだ幾ばくかのお金をくれます。それが狙いで親父は私を連れていくわけです。もちろん、帰りには「子供がお足をもっているしょうがないから」とか何とかいって、私の手からそのお年玉を巻き上げるのはいうまでもありません。商人はけっして偉ぶらず、万事下手にでて、相手を立てて、頭を働かせて利を得るべきだというのが、親父の哲学でした。そこには土農工商的な遺風がまだ残っていて、地主は一番偉いもので、商人が一番下だという考えがあったようです。それが私にはいやで、歴史の授業で土農工商の序列を聞かされたときは、我が家の職業を恨んだものです。

さて話は戻りますが、我が家には現金がたんまりとあることで狙われたんですが、夏に明け放して寝ている泥棒に入られ、朝起きて、畳に土足の跡がついていて大騒ぎしたことがあります。十数人もの人間の寝ている枕元を徘徊するのですから、大胆な奴です。その時は都電の車掌さんが首からぶら下げている車掌バッグを我が家では代金の受払用に使っていて、それには

たんまり現金が入っていたのですが、それが盗まれました。しかし別の時にもっと凶悪なことが起きました。二人組の恐喝犯が刃物を持って親父を脅して、カネを出せとすごんだんです。すぐに家中のものが周りを取り囲んだんですが、なにせ七首を親父の首筋に突きつけているものですから、遠巻きに囲んで固唾をのんで見守る以外にありません。私も机か何かに上って、中の様子を見ていたのですが、そのうち、お金を持った銀行員風の人が二人ほど到着して、親父を離すと同時にお金を受け取るという段取りになったのですが、この二人が実は警察の人で、恐喝犯はまんまとねじ伏せられてしまったということがありました。そんなことから、警察官がしょっちゅう立ち寄って、酒を飲んだりということが必要になったのでしょう（あるいはそういうって警察側が知恵をつけたのかも知れません）。また親父が地域の防犯協会の責任者になったりして、警察とも懇意でした。その結果、時によると、例のやくざと警察関係者（さすがに制服組ではありませんが）が鉢合わせすることもあり、さぞかし険悪な雰囲気になるかと思いきや、その反対に至極和気あいあいとしているので、子供心にも、どうも変だなという感じを拭えませんでした。後に、我が家のアパートの一つに住んでいて、調子がよいのですが、気弱そうでいながら、それでいてどこか小ずるそうな、建て売り住宅かなにかを手がけている男がいて、奥さんに逃げられて男手一つで子供を育てているとかで、同情を引くのはうまいのですが、どうも実がないなと思っていたら、突然新聞に顔写真が載り、殺人犯で逮捕されてしまいました。兄貴が「そういえば家賃も滞っていたし、金も無心されたが、殺されなくてよかった」と述懐してるのを聞いたことがあります。その時、いかにも強そうで、粗暴な奴が殺人を犯すとは限らないという実感を強く持ちました。

勉強が嫌いで、外で遊ぶのが好きで、遊びの工夫はいつもやっていたんですが、あることをきっかけに本を読むようになりました。それは盲腸の手術をした後（そういえば、その時も親父は男は泣くものではないを繰り返していましたが）、予後の回復のために病院に一週間ほど入院することになったからです。なにせ、寝込んだことがないので、退屈で仕方ありません（もっとも、小学校に入学する以前は栄養失調のためか虚弱体質で、また極めて疝の強い、てんかん持ちの子で、額にはいつも青筋が張り、時たまひきつけを起こしたりしたらしく、舌をかむといけいないと母親がとっさに指を差し入れたら、今度はその指がかみ切られる恐れが出てきて、匙と変えたといったこともあったそうです）。病院の院長夫人が退屈でしょうからと少年少女世界文学全集を持ってきてくれて、これを読みなさいと差し出してくれました。それがきっかけで、小説の世界にのめり込むようになったわけです。もっとも、それ以前から漫画はよく読んでいて、『冒険王』とか『譚（探かもしれませんが）海』といった少年雑誌を回し読みしたり、紙芝居をみたりしていました。その頃読んだものはなんといっても手塚治虫で、それから小松崎茂の『砂漠の魔王』のリアルで精緻な絵に感激したり、更に山川惣治の『少年ケニヤ』や『荒野の少年』といったものに引かれていきました。紙芝居はもちろん『黄金バツ

ト』です。しかし、母親は自分で買っておきながら、どこからか漫画は子供によくないといっているのを聞きつけると、漫画はダメということになり、押し入れの奥かどこかに隠してしまったりしました。そんなこともあって、漫画の延長から子供向けの冒険小説、そして世界文学全集へとグレードアップしていくことになりました。もう一つはラジオです。ラジオ全盛の時代で、有名な『新諸国物語』（「白鳥の騎士」「笛吹童子」「紅孔雀」「オテナの塔」「七つの誓い」など）より前に、「鐘の鳴る丘」という子供向け番組もありましたが、私の脳裏にいつまでも残っているのは、大人向けの滝沢修の「銭形平次」、島田章吾の「鞍馬天狗」、徳川夢声の「三国志」や「宮本武蔵」で、後には森重久弥と加藤道子の「日曜名作座」をよく聞きました。また「新しい道」とか引き揚げ者の消息に関する「尋ね人」のコーナー、さらに「話の泉」や「20の扉」などのクイズ番組もよく聞きました。ラジオは人間の豊かなイメージ力を育てるのによく、今でも滝沢修の『銭形平次』のあの柔らかな声音が三味線の伴奏とともに忘れられないし、『三国志』は徳川夢声の語りと小沢英太郎のあの野太い声によって、すっかりその虜になりました。それで吉川英治の小説を読んでもっとファンになり、最後は平凡社の四大奇書シリーズで『西遊記』『水滸伝』とともに原本を読むようになりました。漱石の『心』の解説を読むと、解説者がこの小説に触れたのはラジオの朗読だったといっている、その時の感動が終生忘れられないと書いています。さぞかし『心』の朗読はよかっただろうと想像されます。

そんなわけで、私の少年時代は自由奔放に好きなだけ遊んだ記憶があり、勉強とは全く無縁でした。だから小さいときから、勉強を人に教わったという記憶がなく、興味があると、自分で調べたり、考えたりというやり方をとっていて、それは今も変わりません。ですから、私には師というものがいません。師によって導かれたという記憶がないのです。また私は能力を伸ばしていくための、制度化された教育システムというものに乗ったことがありません。そういうものに出会うと、たちまちうまくいかなくなります。もっとも、父親は無学でもいいと思っていたわけではなく、その反対に商人は読み書き算盤ができなければならないと考え、毎晩のように、夜になると1日のお金の出し入れを計算して帳簿と照らし合わせるのですが、その時、いつも読み上げ算をさせられ、算盤を入れます。ですから、算盤での四則計算や暗算は小さいうちからやらされていました。とはいえ、母親が死んで、大事なものがしまっている行李の中から小学校時代の通信簿が出てきたんですが、それをみたら、盲腸で一週間休んだ以外は皆勤ですが、成績は惨憺たるものでして、これでよく親ががみがみ言わず、少しくらいの説教で済ませていたなあときれるばかりです。先生の書いた寸評だか、所見だかには、「時々度を過ぎた悪ふざけをする」とか、「授業中落ち着きがない」という書き込みがあったりして、先生を手こずらせていたなあという気がします。事実、これはあまり告白したくないことですが、学校ではしょっちゅう立たされていて（悪戯や規律違反や宿題忘れなどで）、近所の人が「今日も立たされていた」と母親にいうもんだから、それもあって、母親はPTAなるものにい

ったことがなかったのかも知れません。『トム・ソーヤの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』は、実はそうできなかった少年時代を送った大人たちの、半ば羨望の混じったノスタルジーとしての意味も持っていますが、私の場合は本当に正真正銘そうした遊びを満喫した少年時代を送ったものとしての共感があります。もっとも、トム・ソーヤとは違って、私の場合はベッキーというガールフレンドは出てきませんので、今、家で飼っているーというところと正確ではないので、同居しているというべきでしょう。ダックスフントはベッキーという名前で、何十年ぶりかでトム・ソーヤの気分を満喫しています。

3. 中学・高校時代

ところで、中学生や高校生の時代のことははるかに弱い記憶しか残っていません。成績がどうだこうだということよりも、面白い遊びをしたという思い出がないからです。本当は大事な時代なのですが、無邪気に遊んでばかりいるわけにもいかず、段々と物心がついてきて、将来のことに関する漠然とした不安といったものが出てきたからです。考えてみると、何の取り柄があるわけでもなく、何になりたいといった積極的な希望も持ち合わせていません。強いて言えば、子供時代がそのまま続くことが一番です。もちろん、こつこつ机に向かって地道に努力したという経験もないので、お仕着せの勉強をしようとしてもすぐに飽きてしまい、ぼおーとしていたことが多かったのではないかと思います。ただ、貸本屋にはよく通いました。時代小説や探偵小説、冒険ものといったエンターテインメントものを片っ端から読みあさりしました。もちろん、世界文学全集や日本文学全集もよく読みました。それから、映画です。映画は小学校の頃から好きで、鍋屋横町や中野駅前にある映画館に頻繁に通っていました。私は手塚治虫、チャップリン、松本清張が大好きで、それはそれぞれ小学校、中学校、高等学校の主要な読書と観賞の対象を占めていたようです。

とはいえ、私の心のどこかには、こうしたことに時間をつぶすのは不真面目だとか、不謹慎だとか、あるいは「高等遊民」だとかいう感覚がたえずあって、人間は額に汗して働かなければならないという道徳心のようなものを、知らず知らずのうちに親から教えられていたように思われます。中学生の頃、一夏引きこもって小説ばかり読んでいたら、兄貴から「なんだそんななまっちょい顔をして」をいわれ、ひどく恥ずかしかった覚えがあります。みんなが額に汗して懸命に働いているときに、ひとりそこから外れて遊惰なことにふけていてはならないといった感覚です。ですから私には、知識で生計を立てるとか、それで社会に貢献するということに対するある種の後ろめたさや恥ずかしさがあって、肉体労働で生きていかなければならないと思うのですが、さて、子供の頃の自由奔放な遊びの時代はともかく、物心ついて段々と大人の体に近づいてくると、肉体に自信が持たなくなってきます。健康にはむしろ自信がありま

すが、肉体的に強壯とはどう見てもいえないので、体を売り物にはどうしても出来ないというのが、悩みでした。そうかといって、知的な技能や知識、つまりは医者とかエンジニアとか発明家とか自然科学分野の学者のように、「科学」を売り物にする世界は立派な仕事だが、それらの知識がまるでなく、そうかといって小説や絵画などの芸術とか社会分野（社会「科学」という概念は当時の私にはなく、科学といえば、自然科学ばかりだと思っていました）の仕事をするというのは、それが仕事かという思いと、なにかしら後ろめたいと感じていました。いわんやスポーツや映画や芸能となると、それは完全に遊びであって、そんなことを職業にしなければならないのは、世の中のはぐれものがすることで、まっとうな人間のやることではないと考えていたからです。それは子供の頃、まわりにはいたやくざめいた人間にどこか生活の匂いを感じられず、まっとうなことをしていないという思いがどこかにあったのでしょう。またボクサーなども一時的にはいいが、年をとると本来の仕事に戻らなくてはいけないとも思っていました。体に彫り物をした人は若い頃は威勢がよくて立派そうで、自らもそれを誇って縁台などでわざわざ裸になってはその偉容（実は異様なのですが）を自慢していましたが、年をとって、体がしぼんできたり、たるんできたりすると、目も当てられない状態になります。しかもそうした人は例外なく長年の不摂生と酒の飲み過ぎで、体が不自由になったり、舌がもつれたりして、なおかつ蓄えもないので、老後に恵まれないことが多かったのを沢山みてきました。あれもこれもみんな地道でもいいから、まっとうな仕事につかないからだと考えていました。自分はああはなりたくない子供心に強く自覚していました。この点でフーテンの寅さんの映画を沢山みましたが、それぞれに味わい深いのですが、私のみた最高傑作はなんといっても音無美紀子と小沢昭一がでた、テキ屋の末路を描いた『寅次郎紙風船』です。これは寅さん映画ではない、フランスのジャック・フェデやジュリアン・デュヴィヴィエやルネ・クレールの人情もののような味わいを持った逸品です。こうした一見自由奔放で威勢のよい遊び人、渡世人の、実は美しくない、みっともない末路を近くで多く見てきました。そんなこんなで中学・高校生時代を過ごしたので、段々と暗くなっていき、最後には大学受験にも失敗します。うかつなことに入れるものだとばかり思っていたので、行くところがなくなって、浪人生活と言うことになります。私にとって散々な10代でした。また世情が段々と騒然とし始めてきていました。勉強どころではないといえば、責任転嫁かもしれません。というのは、60年安保闘争というのは、私が浪人生活を送っていたときで、ゼネストで国鉄が止まった、国会議事堂がデモ隊に取り巻かれ、樺美智子さんが殺された、ハガチー（米特使）が羽田で動けなくなってヘリコプターで救出されたといった出来事をすでに大学に入学していた同級生の口から聞いたり、新聞、テレビの報道で知ったり、実際に見に行ったりしただけで、そこに直接に参加したわけはありません。でも、世の中が何か動いていくような予感、若者が猛烈に前に出て行くような機運は強く感じました。

4. 早稲田大学時代

私は1961年4月に早稲田大学第一商学部に入學しました。その時のクラスがケ組で（へ組でなくてよかった）、現在でも同窓会を東京で定期的にやっています。時には、温泉旅行にも行くようです。古典芸術の観劇会を催して、その後、有名レストラン巡りをやったりしているようで、優雅なものです。というのは、私は一度も参加したことがないからです。この連中と疎遠になったのは、今に始まったことではありません。最初の頃は一緒に行動していましたが、途中から私の行動パターンが違ってきて、付き合う相手がまるで違うようになったからです。でもゼミナールの関係では交流は今でもあります。私のゼミナールの指導教授は柳井哲男先生で、残念なことに、早稲田の大学紛争の際に不慮の死を遂げました。この先生には『資本論』の精読を強く薦められたという経緯があり、それでゼミの仲間数人と一緒に『資本論』を読んでいったという、私にとって終生忘れられない思い出がある先生です。その後、その先生筋にあたる町田実教授の下で指導を受けましたが、町田先生は現在でもご壮健で、定期的に同窓会（「町田会」）を開いていて、たまに参加することがあります。大学の校友会館で開くこの会は盛会で、先生の隠然たる力を目の当たりにします。この会が組織されているのには、卒業生が今でも社会、とりわけ企業の中でしっかりと根を下ろした活動をしているというところにありますが、学内に有力なゼミ卒業生の世話人（副学長）のいることも大事な要素だと思います。ここで面白いのは、重立った人の挨拶の際に必ず「私は慶応は受験していません」とか、「東大にも入ったけど、早稲田にきました」とかいう人がいることです。後者は今では考えられないような話だと思っていたら、私の娘の同級生にプロのマジシャンがいて、東大（法学部？）と早稲田（政経学部政治学科）の両方に受かったのですが、マジックで地方回りをするので、早稲田なら単位を取って卒業できるだろうと考えて後者を選んだということですが、しかし現実には甘くなく、単位不足で早稲田を退学したそうで、親は泣くに泣けなかったのではないかと我が妻も嘆いていました。もう一つ、この集まりでは必ず最後に記念写真を撮るのですが、何しろ多すぎて一回に収まりません。そうすると「優の数が一桁の者まず集まれ」と号令がかかります。成績優秀を卑下し、劣等を誇るような気風です。高級官僚になったり、大会社の社長に取まったりするのは、秀才がすることで、そんなことは早稲田には向かないという矜持です（その結果、馬鹿ばっか集まっているとして、「馬鹿だ大学」と揶揄する人もいますが）。この二つのことは稚気に等しい振る舞いともとれますが、それが早稲田のアイデンティティだと感じ、それによってシンパシーを感じて集まってくる人もいることを考えると、同窓会の存在意義として、あながち否定できないことかも知れません。それに加えると、早稲田のホームページには卒業生というカテゴリーとは別に「中退者」という欄があり、これも、早稲田出身者には社会へ出て偉くなった奴には中退者が多いという伝説からきているのかもしれない。そう

いえば、政治家などで偉そうな顔をして早稲田出と称して、我こそは「早稲田精神」の具現者といわんばかりの奴がいますが、その連中、本当に卒業しているのでしょうかね（あんなに単位を取るのが易しかったのに）。

私の大学生活は安保後の挫折感が蔓延している中で始まりました。学生運動は嘘のように潮が引いていて、学生は授業に出て、成績を上げる以外に他に道がないので、とりあえず出ようかという感じでいました。しかしその授業たるものがひどいものが多く、最初、一般教養関係の科目をとらされるのですが、あまりにお粗末だと思ったのか、「日本史」の授業で、平安時代の貴族の婚姻関係のタイプ分類ばかりやっているものだから、学生が立ち上がって、「われわれはこんなことを教わりにきたのではない。もっとしっかり授業してくれ」と抗議し、それでも改まらないので、授業をボイコットしました。また「人類学」では人間の頭部の縦と横の長さの比率を係数化して、白人、アジア人、黒人、そして日本人でそれぞれどう違うかを一覧表にして出し、どういう根拠かを示さずに日本人がもっとも優秀だという、ナチス張りの人種差別論を展開する授業があって、さすがにみんな呆れてしまい、授業をエスケープするようになったのですが、出て行った学生を追って、この教授は4階の大教室から下まで追いかけていき、さらに逃げるのを追って、正門までいったがついに追いつけずに、憤懣やるかたなく、とぼとぼ4階の大教室までようやく立ち戻ったところ、すでに教室には誰もいなかったというエピソードもあります。そんなわけで、勉強は自分でするもの、仲間を募って、一緒にやるものという気風が自ずと湧いてきました。先輩連中もそうしていたわけで、私も仲間と金を出し合って近所に一部屋借りて、そこに集まって勉強会をしたり、喫茶店を朝から半ば占領して一日中議論したり、あるいはインチキサークルを立ち上げて、部室と称するたむろする場所を、学舎の屋根裏や地下室の物置に確保したりして、勝手に勉強していました。だから、私の大学での勉強は教室で、教授から教わったものではなく、仲間内で好き勝手の議論をするなかで育まれたものです。そしてたまに授業に出なければならない時は、心地よい風に当たりながら、居眠りをして過ごしました。こんなことだから、大学紛争の下地はすでに十分すぎるほど作られていて、後はきっかけでした。

私は大学入学とともに、父親を亡くすことになりましたが、これを契機にあれほど繁盛していた家業に次第に翳りが出てくるようになりました。養父母ではありましたが（というよりも、だからこそというべきでしょう）生後1年になるかならないかの時から本当に私のことを可愛がってくれて、父親に関する思い出はたくさんあります。母親の話によると、毎日の仕事が終わるや、親父は私を肩車か何かして、その辺をぶらつくのですが、その後、決まって屋台かなんかの飲み屋で一杯飲むそうですが、その際に私を懐に入れて首だけ出させているのだそうですが、そのうち私が眠ってしまい、親父も疲れとほろ酔いでうとうとしているようで、その頃を見計らって、夕飯だとお袋が迎えに行つて、一緒に帰ってくるという日課だったそうです。

その話を聞いたとき、じーンとくるものがありました。無骨ではあれ、愛情豊かな父性愛が感じられます。頼りにしていた親父ですが、私が高校生の頃から、体調を崩すようになり、手術や予後の療養のため、転地治療などもしましたが、うまくいかず、ついにはかなくなりました。親父が死んだ後、大学の授業が面白くもないことから、本気で大学をやめて、兄貴と一緒に家業（当時は材木商よりも土建業の方が中心だった）を継ごうとも考え、学校に行かずに手伝っていました。その後、兄貴が自分が家業を継ぐから、おまえは学業に励めということになって、大学に戻るようになったのですが、おかげで一年生の時の単位取得はひどいもので、わずか4単位でした。

兄が商売を手広く展開し、当時高度成長のさなかで拡張戦略を誰もが先を争って展開していました。当初は景気がいい話ばかりが出てきましたが、そのうち、ちょっとした焦げ付きや何やらから始まって、融資の返済に困るようになり、そこで、新興成金の悲しさで、店や自宅やその他の財産を次から次へと抵当に入れ、それでも金繰りが悪く、ついに倒産ということになりました。兄が家に引きこもっていておかしいなと思っていたら、人相の悪い取り立て屋がうろつきまわるようになり、金を返せないなら、女房、子供を売り飛ばすから、かたによこすか、おまえに保険でもかけて消えてもらうかといった、お馴染みの恐喝まがいの事態になりました。兄は弁護士に任せているから大丈夫だといっていました。その弁護士が危ないと直感したので、私の友人の父親が弁護士（この人は人権派の弁護士としてよりも、高名な日本経済の研究者として有名）でしたので、相談に行きました。君には息子が日頃から世話になっているのでということで、一も二もなく引き受けてくれて、債権者と会って、收拾に乗り出してくれました。後にわかったことですが、実際、兄が頼みにしていた弁護士は相手側とぐるになっておおかたの財産を相手側に引き渡そうと手をうっていて、その寸前で食い止めることができたのです。一次抵当権は銀行がすでに持っていて、それに上乗せするように、二次抵当、三次抵当をつけてお金を借りようとするれば、高利で返済条件がきつくなるばかりでなく、その手の金融業者はみんなうさんくさい連中です。我が家の場合は香港系のヤミ金融業者で、配下に暴力団まがいの取り立て、恐喝専門の連中を多数抱えていました。「君のお兄さんはとんでもないやつに金を借りたな」と友人の父親の弁護士はしていました。これにはちょっとしたハプニングもありまして、このすごみを利かした、映画に出てくるような迫力満点のヤミ金融業者が乗り込んできて、今すぐこれに判を押せば、借金はチャラにしてやってもよい。そうでなければ、どうなっても知らないから覚悟しておけと脅しました。兄はすっかり弱気になっていて、ハンコを押すようなそぶりすら見せていましたが、私は依頼した弁護士先生から絶対にハンコを押すな。弁護士立ち会いの下できちんと話をするから、今日は帰ってくれといえとアドバイスを受けていましたので、そのとおりいい、しばらくは押し問答を繰り返して、連れてきた用心棒が刃物を出すかのような素振りすら見せたので、玄関から出て行かないなら直ちに警察を呼ぶ

ぞと引きませんでした。こんなことは映画やテレビドラマの世界のことだとばかりだと思っていましたが、まさか自分がその当事者になろうなどは夢にも思わなかったことです。このことがヤマでその後は平穏な話し合いということで事態は経過してきましたが、結局、家屋敷は競売ということになり、それを買い戻してその後もそこに住んでいましたが、それで立ち直ればよかったのですが、さらに何年かして、再び倒産し、今度は本当に家を手放す羽目になりました（当時は私は京都にきていました）。しかも、借金は我が家の財産ばかりでなく、親戚一同から借りまくったものですから、そこにも債権者がうろつき回り、すっかり鼻つまみ者になりさがり、最後は誰も相手にしないようになってしまいました。その後離婚もし、消息不明になり、長い間音信不通になっていましたが、一昨年秋に亡くなったそうで、納骨の際に長い間一緒に暮らしていた女性と、兄との間の息子という人に話を聞きましたが、それによると、いくつかの職業を渡り歩いたが、自宅で倒れてからは入退院を繰り返して、すっかりやせ細って小さくなり、最後は廃人のようになって亡くなったそうです。いつも体格・腕力自慢だった兄がと思うと哀れになりましたが、むちゃくちゃなことをして周囲に迷惑をかけたことからすれば、それも自業自得かという思いがしないでもありません。納骨が彼ら一家と私だけの寂しいものだったということが、そのことを雄弁に物語っているようです。

大学時代のことを語るには、どうしても学生運動に触れなくてはなりません。きっかけは授業料値上げでしたが、それに端を発して、不正会計、杜撰な経営内容、いくつもの不祥事から、教育内容の水準の低さや反民主主義的な体質まで、さまざまなことが積み重なって、空前の学園紛争が勃発しました。その渦中にいて、さまざまなことに出くわし、また行動してきました。本当に1年365日、毎日大学に行き、おおかたは大学内で寝泊まりするか、近所の友人の下宿に泊まるか、友達と借りていた部屋で雑魚寝するかといった生活を何年か送っていました。この中で得た友達と友情は貴重なもので、大学へきた実感と青春の意味、あるいは友情・連帯といったものを心底味わうことができました。ですから、大学入学時のクラス会とも疎遠になり、一時期うつつを抜かしていた麻雀とも手を切り、ひたすら純粋な気持ちで学生運動に邁進したわけです。したがってもしこのことがなければ、あるいは大学への愛着も、友人との心のふれあいも、まわりの多くの人との新たな出会いもなかったでしょう。したがって、私が早稲田大学に特別の愛着を持っているのは、よく引き合いに出される、虚像としての、どこにも現実には存在し得ないような、奇妙でアナクロニスティックな早稲田精神なるものではなく、実際に自分がそこで経験し、悩み、行動する中で生まれ、血肉化した、共通の価値観を共有する連帯精神を基本とするものであって、それは、日本中のどこでも同じような連帯精神が生まれた時代であって、私たちのものもその一つです。その意味では特別視するつもりはありません。その当時、毎日のように通っていた大学の近くの友人の家のお母さんには、言葉では言い尽くせないほど、本当にお世話になりましたが、数年前に亡くなったと聞いたときには、全身の力

が抜けていくのを感じました。それと一緒に自分の青春時代のあの息吹と情熱に満ち溢れた気概を伴った懐かしい思い出も消えてなくなったような気がしたからです。大学の周辺から高田馬場にかけては私にとっては庭先のようなものでした。狭い路地や通路やその行き先をよおく知っていて、どう辿っていけばどこに出るかもわかるのです。またこの学部にはどんな人がいるかも熟知していたつもりです。しかし、大学紛争にはつらい思い出もあります。卒業できなかったり、精神的に落ち込んだり、親から勘当されたりといったことはむろんのこと、醜いことも起きました。こうした中で、私の先生が消息不明になり、懸命な捜索にも拘わらず、1週間くらい後に玉川上水から死体で上がるという事件がおきました。なんとも痛ましい出来事です。これらのことは痛切な痛みを伴う私の青春時代の忘れられない一コマです。それは喫茶店や部室で口角泡を飛ばして議論していたのどかな時代とは様相が一変する、激動と試練の時代の開始でもありました。

5. 京都での大学院生活

その後、紆余曲折の末、私は京都大学の博士課程に入学し、松井清教授とその弟子の小野一郎教授の指導を受けるようになりましたが、ここでも学園紛争が火を噴いていて、舞台が早稲田から京大に移動したような状態で、これでは何のために入学したかわからない有様でした。何しろ、大学院のゼミをやっていると、突然、連絡が入ります。すると、先生はまず退去し、私らは指定の場所に集合します。しかし鉄パイプで武装した連中に素手で立ち向かう訳ですから、簡単に蹴散らされてしまいます。一度など、教育学部前で、バリケード封鎖阻止の座り込みをしていたら、鉄パイプで蹴散らされましたが、後でわかったことですが、私は胸と耳横を鉄パイプで突かれたようで、裸になると、みぞおちの上に丸い鉄パイプの跡がくっきりと残り、一月ほど消えなかったことがあります。いずれにせよ、そんな方針ではらちがあかないので、われわれも武装して、バリケード封鎖の解除に取りかかりましたが、なかなか進展せず、膠着状態になり、授業も自然休講の状態が続きました。そんなこんなで、まともに研究した記憶がありません。

しかしながら、合間を縫って自主ゼミを開き、研究交流を続けたことも確かです。そのうち経済研究所の杉本昭七教授が海外留学から帰り、松井先生の家でお会いしたのが気縁で、研究会をやらうと呼びかけていただき、直接投資研究会を立ち上げることになりました。当時、多国籍企業の研究が始まったばかりで、先生は現実過程の分析に大いに意欲を燃やされていて、直接投資や多国籍企業に関する内外の文献を片っ端からといってよいほど、読んでいきました。集まったメンバーも多く、今でも国際経済学の諸分野で活躍している優秀な研究者が沢山います。この研究会で議論した内容、研究交流を深めた人々、新たな分野を開拓していったこと、

それらは貴重な財産です。夏にはみんなで合宿することが定例になり、和気あいあい、けんけんがくがく、丁々発止、その他何でも形容詞はよいんですが、共同研究していきました。その成果はいくつかありますが、たとえば『現代世界経済を捉える』は現在まで続く（第4版まで）ベストセラーです。この研究会では本当に鍛えられ、共同研究の醍醐味を味わいましたし、私たちの認識も格段に深まり、集団としての自信めいたものも得ました。私の生涯にわたる研究仲間の多くも、このときに知り合い、そして深まって行って、徐々に信頼関係が培われていったものです。

京都大学での大学院のゼミナールは、私が経験してきた、講義に期待できないから自分たちで自主的にやろうというのとは違って、基本は先生の研究室での正規のゼミナールです。さすがに先生方は研究にはみな自信を持っていて、テキストを決めて輪読し、討論するという形で、それにたいして適切なコメントと卓越した理論構成、そしてまた深い学識が随所に現れてきます。容赦ない批判や卓抜な発想法、そして例外なく、研究史や文献渉猟に通暁していて、テーマごとにどこまで研究が進んでいるか、どこが未開拓な分野か、どれが論点か、そのためにはどんな文献がどこにあるか、そしてどれが種本になるかなどが直ちにいえるようになっていて、さすがだとの感に打たれると共に、それを苦もなく理解する優秀な院生ばかりなので、圧倒されたこともあります。ああこれが大学院での研究なのかと悟らされたわけです。京都大学は特にそうなのかも知れませんが、独自色や創意工夫に凝り、それを競い合うような側面があります。したがって、研究においても独自色が出ていないと、そんなことをわざわざ研究する必要があるのかと、一蹴されます。そう直裁にいわなくても、明らかにこいつは頭の悪い奴だという冷やかな態度が窺われて、その冷たさに思わず身震いするといったことが一再ならずあり、迂闊なことはいえなくなって、自然と萎縮するといったこともしばしばです。またその場で直接に研究指導をせずに、テーマは自分で選び、研究したのを見せにいくわけですが、一顧だにされないこともあります。いちいち手を取って教えるといった初歩的な手ほどきはしてくれませんので、論文を書けない奴は大学院にいる資格が元々ないといわんばかりに扱われます。電話して先生の家を尋ねようにも（というのは、大学の研究室で勉強している先生は、紛争中のこともあってほとんどいなく、自宅で研究しているので）、そんなつまらないことで電話するなど手ひどくやられることもありました（もっともその理由は必ずしも研究の妨害もしくは中断ばかりでなく、夜通し起きていて、午前中は必ず寝ている先生や、テレビの「水戸黄門」や「銭形平次」が見られなくなるので午後八時台の電話には機嫌が悪いという先生もいました）。私がそうしたアカデミズムの洗礼を受けたことは、長い目で見ると有益でした。学問を安易に考えず、きちんと制度化された中で、常道を踏んで一步一步上っていくというやり方を否応なく身につけさせられたのは、結果的には大変よかったことです。若いうちにこうしたことを身につけていないと、後になっては身につけません。そして身につけるには、容赦なく手厳しく

することが効果的です。それについてこれない奴は駄目だという基本姿勢です。したがって、院生同士の研究評価も手厳しいものでした。そこには自分たちが日本のその分野の最先端を行っているという自負心が先生方にあり、そこからくる自信に溢れていました。そうしたことが院生にはもっと尖鋭にあり、その点から教授陣への批判と評価も容赦なくしていました。この評価に耐えられない先生のところへは院生が行かなくなるので、先生と生徒の間には研究水準を基準にした綱引きとそこからくる緊張関係がありました。元々京大での学園紛争にはこうした閉鎖的なアカデミズムの弊害、つまりは教授の権威主義への反発が強かったのです。

そんなことが私には大いに重荷になり、また励みにもなりました。だから、テーマの選び方、文献渉猟、視点の設定、データ分析、批判対象、論法、精緻な構成と展開などの、研究上必要な基礎的なテクニックはこの時代に必要性を認識し、鍛えられたもので、その後長い間かかって徐々に身につけていったものです。その点で、私の京都での大学院生活は貴重な体験でした。ですから、今でも京大に行くと自然と背筋が伸びるような緊張感と改まった気分になり、この大学で大学院生生活の最後を送れたことを誇りに思う実感が湧いてきます。とはいえ、京都での私の大学院生生活は全体としてはけっして晴れやかなものでも、満足いくものでもありませんでした。大学紛争が一段落ついて、さて本格的に研究しようということになったのですが、私の研究が進みません。それはそれまで抽象的なことをやっていたのですが、それではなかなか頭角が現せないからです。そうかといって、にわかには現実的なもの、実証的なものに転向出来るわけでもありません。それは息苦しいものでした。

6. 山口大学時代

私の京都での大学院生活が実を結ばないところへ持ってきて、指導教官が急死するという事態が起きました。踏んだり蹴ったりです。途方に暮れかかったのですが、かろうじて論文をいくつか作り上げ、それで山口大学で拾ってもらうような形になりましたが、それには鈴木重靖先生が松井ゼミの出身者で、同門だということが大きく影響しています。私は鈴木先生と巡り会えたことをとても感謝しています。山口大学で過ごした8年4ヶ月の間、先生は陰に陽に私を励ましてくれ、ある時には私の生硬な議論をやんわりと批判し、研究の土俵を広げることを助けてくれました。また別の時にはソ連社会主義の官僚主義と計画経済の弊害を手厳しく批判して、社会主義への多様な道の可能性を示唆してくれました。そしてスミス、マルサス、リカード、ミル、ワルラス、マーシャル、ケインズなどの経済学の代表的な古典を丁寧に読んでいったのも、先生との研究会でのことで、これもすぐに役に立つというよりも、長い間の滋養剤のような効き目があります。小野一郎先生からは「田舎の勉強、都会の昼寝にしかず」と揶揄されましたが、私にはこの田舎ののどかな雰囲気がよく合うのです。そしてこの山口での8

年余は動く、学ぶ、遊ぶの三つにつきます。なお、山口大学に採用されたのは1972年12月1日ですが、そのときの私の月給が3万6,000円（？）で12月5日に辞令をとりに来いといわれたので、出かけていくと、少しですがボーナスが出ていますとあって、ボーナスまでもらいました。それで帰りは山陰側を回って帰ることにし、温泉に泊まったことを覚えています。

さて第1に組合活動に精を出しました（動く）。日教組大学部の執行委員として中国・四国担当ということになり、この地域内の大学に行くばかりでなく、教研集会や大会、執行委員会、その他の行事にもれなく参加しました。おかげで日本中をしょっちゅう駆け回っているような状況で、新幹線がまだ中国地方までは延びていず、行きは金星に乗り込むと朝には名古屋に着き、そこから東京まで新幹線で、帰りは夕方に東京から名古屋まで新幹線で行って、意識朦朧としながら金星の夜行寝台に乗り込むと朝山口に着くという行程が通常でした。3年間にわたって執行委員を務めました。そんな忙しくて、授業はちゃんとやっていたんだろうかと今思うと考えますが、多分していたと思います。それでも、この経験で得たもの、つまり組合に結集する多くの教職員と率直に付き合えたのは、私の生涯にとって忘れられない思い出になっています。会議の運営の仕方、決を採るタイミング、方針への批判、論争の仕方、少数意見のくみ上げ方、会議のメモの取り方と総括の仕方、発言の方法、文書作成、スケジュール作りなど、学生運動時とはひと味違う、洗練されたテクニックを沢山学びました。また、夜の宴会を利用した多数派工作のあれこれも垣間見ることになりました。

第2に研究活動にも精を出したつもりです（学ぶ）。大学の官舎に入っていましたから、朝起きて子供が幼稚園に行くのを見送ってから、大学に行き、昼飯を食べに一度帰り、また学校に行き、晩飯を食べに再度帰り、子供と風呂に入ってから、三度学校に行き、そして夜中に寝に帰るといった状態で、とにかく勉強を満喫しました。この時代は本当によく勉強したと思います。ただし、地方にいと、どうしても刺激がありません。また研究仲間も少ないので、状況に流されはじめると、どんどん怠惰になっていきます。そこで、最低限の目標として、1年に1度学会で報告すること、1年に1本の論文を書くことなどの目標を掲げました。そしてとにかく、成果を出すことが一番だと得心し、それに最大の重点を置きました。膨大な研究白地図にまず点を打ち込むこと、そして点が生まれれば、次の点を探ること、そしてさらにその二つの点を結んで両者の関係を考えること、こうして線が出来れば今度はさらにそれを面に広げていくこと、そして面が出来上がれば、今度は立方体にしていくこと、そしてこれらを基に建造物を立ち上げるという順序で、研究の蓄積を図りました。最初、いくつかの点を探し出すことが大変ですが、当初はバラバラであった点が、そのうちに線で結ばれるようになり、そうになると、その中の空いている点がわかるようになり、そうして埋めていくと立派な面が出来上がります。こうなればしめたもので、研究が楽しくて仕方がない、至福の時代が到来し、次々と新たな関心とテーマとアイデアが湧いてきて、それこそ寝食を忘れて研究に打ち込むとい

う状態になりました。次に寡作から多作への、研究成果への考え方の切り替えを図りました。私は若い人の通例に漏れず、当初は寡作でした。成果発表に自信が持てないこともさることながら、材料を基に具体的な成果に仕上げていく技（わざ）が不足していたのです。そのため、研究の蓄積は進んでも、成果の蓄積が伴いません。その結果、過剰蓄積傾向に陥って、益々研究成果が出にくくなり、どうかすると、これまで折角研究したことを途中ですっかり忘れてしまうこともありました。自家撞着に陥っていたわけです。もったいないなと思います、何とかならないものかと考えあぐねましたが、そうだ、適当なところで切り上げて、成果にすればいいんだと、割り切ることに決めました。それには成果になるようなテーマに区切ることが大事になります。そこでそのテクニックを身につけることに腐心しました。

このように、目標設定、多作主義への考え方の転換、そして適当に区切るという割り切り方とくると、その次にはそのために何よりも大事なことはテーマ設定です。それには目の付け所を探し、感覚を研ぎすまし、直感力を高めることです。自分なりの視点を探し出すことは研究者の大事な資質ですが、それは自然に生まれるものではなく、絶え間ない努力と日頃からの観察と熟慮から育ちます。たえず考えていることです。そうすると、何かの拍子にアイデアが湧いてきます。そのために小さなメモ帳を持っていて、どこに行くときも、トイレにも枕元にもそれをおいている人がいます。私も自分にあったアイデア帳を作ってそれに書き込むようにしています。そして定期的に取り出し、何度も何度も読み返して、補充し、整理していきます。夢の中で、すばらしいアイデアが浮かんで、速くメモしなければと思うのですが、その時はしっかり覚えているのですが、朝起きるとすっかり忘れていることがよくあります。もったいなと思います。私の研究仲間の一人で、もう亡くなっていますが、彼は夜中になにかひらめいたら、直ちにその道の泰斗で、夜中中起きている大先生に電話して、意見を拝聴するのですが、そうすると彼女からは「貴方酔っぱらってるでしょう」とまずお小言を頂戴しますが、その後丁寧にコメントしてくれるそうです。それを必死になってメモするんですが、朝になって見直してみると、酔っぱらって書いたものだから、何が書いてあるのか判読できないという話がありました。こんな横着なことをやってはいけませんが、ひらめきは大事です。これは私の推測ですが、電話を受けた大先生のほうはしらふですので、彼からのヒントをしっかりと自分のものにしていたのではないかと。それで研究が中断されてもたいして怒りもせずにはいたのではないかなどとも考えています。

まあそれはともかく、もっと楽な近道もあります。それは研究動向をたえずフォローしておくことで、そのためには概説書やファクトブック、私の場合なら、アメリカ議会の公聴会で準備される問題別の議論と立法と資料を整理したソースブックが格好です。アメリカの大学ではリーディングスと呼ばれる課題別の、代表的論者のエッセイや本の中からの一部抜粋を編集したものが大繁盛です。中には市販されずに、今風にいえば、海賊版として簡易製本されたもの

も古本屋などで売っています。これをまず学生は読んで勉強するわけです。もちろん、自分でこれを作ることが一番です。私も貿易，多国籍企業，多国籍銀行，対外援助，技術移転など自分で設定したテーマごとに，論文の取捨と整理をして自家製リーディングないしはソースブック作りを若い頃からおこなってきました。もちろん，日頃から新聞・雑誌によく目を通し，スクラップ帳を作ることも役に立ちます（私は20代からはじめて40年以上新聞のスクラップ帳作りをしています，実際にそれを見直すというよりは，新聞をスクラップにする過程で大抵は読んで記憶してしまうので，それで捨ててもいいかもしれません）。さらには，論文や資料，本はコピーの力を借りて，必要と思われるものは何でもコピーして，一カ所にまとめて整理していったらよいのですが，それが一般化していないときには，本を二冊買って必要な箇所を切り抜き，糊で貼り付けて整理するという荒療治もやりました。本はノートであり，材料です。切り抜こうが，線を引こうが，書き込もうが，折ろうが自由です。もったいないなどと考えていたら，研究は進みません。そしてこうした工夫と努力の末，それらの自家製のソースブックの力を借りて，自分のテーマに最短距離と最短時間で届くようにしました。これは年を重ねると，次第に身につくようになります。そしてその仕上げはテーマごとのノートブックを作るようにし，着脱自由で，自由に入れ替えたり，付け加えたりすることが出来るフィラーノートを愛用しています。後に話をしますが，1990年代からは出来るだけ1頁に見渡せるように，追加部分をテープを使って貼り付ける方式をとるように変えました。折りたたみ式で，開くと全容がわかる仕掛けになっています（これは大きなボードを壁に括り付け，それに全容がわかるように書き込むというやり方で，さらに応用していくことになります）。そしてあるテーマに関する研究をおえ，原稿に仕上げたら，関連した資料や文献など全てをそこにまとめて記載して，ファイルして，表紙に済みの字を書いて棚に並べておきます。そうすると，自分がどれとどれを原稿にしたか，それらの繋がりはどうか，また欠けているものは何か容易にわかるようになります。またこの論文を書くときにはどういう手順で，どういうソースブックを使い，またどういうデータを分析したか，またその目の付け所や悩んだことなどもわかるようになります。この4色に分けたファイルブックが200冊以上も後ろの棚に並んでいて，それは自分の研究生活の証にもなり，いつもそれらを見渡しては，研究の進捗状況をチェックし，またしばし満足感に浸っています。この方式は講義用のノート作りにも応用していて，さらにその中に透明のスクラップファイルも収容して，そこには取り出し自由な切り抜きなどを差し挟んだりしています。私はまた，辞書を活用することにも随分前から心がけています。辞書を二冊買って，テーマごとに切り抜いて整理し直したり，コピーして同様の整理をし直してきました。特に新しいテーマを追うときには，最初に必要な基礎知識，基礎概念をきちんと整理し，頭に詰め込んでおくことが大事なので，辞書の効用を最大限活用するようにしています。

最後に研究上の仲間を作ることがさらに大事です。私はこれには若い時分から努力を重ね，

仲間作りに精を出してきました。大学時代から、仲間で集まって本を読み議論するのが生活の一部になっているので、何とも思いません。遠慮なく言い合える、真剣に討議でき、仲間内のルール（掟）（このことをホブズボームは研究上の相互扶助関係、研究の貸し借りとっています）をしっかりと守れる仲間を作れたことが、私の研究活動を大いに高めてくれました。自分だけの抜け駆けは仲間組織を解体させ、自分を孤立させ、結果的には破滅に導きます。その際、同門とか、同一学派とか変な縄張り意識は取っ払って、出来るだけオープンに、そして自分とは対極にいる人でも頭を低くして教えを請うという謙虚な姿勢が大事です。もちろん、学派的な結束が社会科学分野の学問を進めたことは否めませんが、私のとるところではありません。平気で他流試合をしに行きましたし、年齢や業績や学閥に関わらず、研究組織を作り、また運営してきました。そうしたオープンで民主的で自由闊達な意見交換が大好きで、その中にいると、自然と啓発され、よい研究が出来そうだという自信が湧いてくるのです。ですから、これらをまとめると、よいテーマ、よい議論、よい運営が共同研究の鉄則であり、それが結果的にはよい研究成果に結びつくと確信しています。そしてこうした共同研究の経験を積み、研究者の輪を広げ、それに習熟することをぜひ若いうちに身につけて欲しいものです。話はそれますが、なぜ「都会の昼寝」なのかといえば、たとえば京大などでは優秀な学生や院生が沢山いますから、彼らに課題を与え、報告させ、議論させておけば、教授は半ば昼寝していても、自然に賢くなるわけで、研究の集積効果があるわけです。ですから、大学がその域に達したら、その大学は研究上、一流ということになります。そういえば、私の先生方もよく居眠りしていましたっけ。

さて第3は遊ぶです。京都で忘れていた、あるいはもっと古く、大学時代以来忘れていた（大学時代は山登りを友達としていたが、その後中断し、さらに立命に移って、50才過ぎてから、夫婦共に健康で長生きしていかなければならないと気づいて、夫婦で山登りを再開し、そんなこんなで日本百名山の六割方は登っています）生活をエンジョイすることです。昼休みにはソフトボールをやり、日曜には日本海に釣りに頻繁に出かけました。のちには釣りクラブでボートまで購入しましたが、それで危うく遭難しそうになった仲間が出てきました。私が子供の頃満喫していたあの遊びの世界です。これは私の中に眠っていた人間性の回復を呼び覚ましたようです。楽しい時代でした。私は、自分が秀才育成スクールでの制度化されたシステムに乗らなかったことがなく、またそれが大の苦手だということもあって、こうした田舎の環境で好き放題に自由に研究することがもっとも合っているような気がします。何かしら、生き生きとしてくるのです。発想も豊かになります。京大時代の追われるような圧迫感から解放され、新鮮な気分の問題意識も研ぎ澄まされてきて、ある発想を得ました。それはアメリカの貿易構造をそのもっともオリジナルなデータに基づいて、実証してみたらどうなるかということです。私は現実問題への転向を志していましたが、なかなか果たせないうでいました。多国籍企業の研

究を進めながら、その取っ掛かりを掴もうとしましたが、その前提として、アメリカ貿易の解明をしようと思いついたのです。そこで、内地留学の機会が与えられたのをチャンスに、京都でこれに集中しました。幸いにして、内地留学の終了時には何とか目途がつき、山口に帰った後、さらに発展させて、いくつかのまとまった仕事を研究叢書の形で出し（『アメリカ貿易の歴史的傾向』、『アメリカ貿易の戦前構造』、『70年代のアメリカ貿易』）、さらにそれらを基に最初の単著であり、博士論文にもなった『現代アメリカ貿易分析』を上梓することが出来ました。これは私の研究の出発点であり、忘れられない思い出を多く含んだものです。

そのことは私に多くのことを教えてくれました。まず、オリジナルなデータを分析する喜びと楽しさです。ファクトファインディングに目を開かされました。暗黙に前提していた固定観念が、データと違うとき、それをどうするか。色々試行錯誤することは、理論そのものを純粋に突き詰めて行くのとはまた違う味わいと、それが解明されたときの目から鱗が落ちたような爽快な気分があります。まさに醍醐味です。多くの前提をおいて、純粋に論理を積み重ねていくことも、詰め将棋のような味わいがあり、捨てるべきことではありますが、この弱点は現実が見えないことです。経済学という学問そのものが、日常そのものをそのまま投影したものではないので、それでなくても、概念が何を表しているのか、簡単には想像できません。いわんや、いくつもの前提をおいて、がんじがらめにしておいてから、想定された課題を証明していても、実際何のことか、あるいは何を証明できたのか、多分ごくわずかの人が理解できないでしょう。しかも、その前提が現実に迫るための必要な作業と想定であれば、つまり現実性をもっていけばいいですが、それが非現実的な想定であった場合には、全てが瓦解する危険すらあります。また、証明したことが極めて常識的なことの場合もあります。それは実証研究でも同じことで、直感的にわかっていることを手間暇かけて作業したに過ぎないということも往々にしてあります。「大木削って楊枝一本」と揶揄した人がいましたが、それも宜（むべ）なるかなという思いもあります。しかし直感で感じられたことをデータで証明出来たことはその直感が間違っていないことですから、そこからさらに深く分析していくことが可能ですし、そのための勇気も湧きます。それが研究には大事なのではないでしょうか。またデータの加工や別々のデータを組み合わせると全然別の世界を作り上げることも有意義です。どのデータもわれわれの考えている意図とは違うものであることがほとんどです。それを加工し、改築して、別のもの、自分が証明しようと考えているものに作り変えていくのです。これは本当に楽しいことです。別の世界が出来上がるのですから。そのためには、データ批判と評価をすることが不可欠です。そしてオリジナルなデータの分析を通じて発言することは相手に有無をいわせない効果があります。経済学や社会科学はともすれば見解の違いで済ませる空中戦が多いのですが、それでは学問は発展しません。かみ合った議論をしていくためには共通の土台、共通のデータ、共通の認識が求められます。そしてこの共通の土台で議論するからこそ、われわれの認

識の間違いや評価の違いが、あるいは思慮の浅さが白日の下に晒されるわけです。したがって、データの共有性、共通の認識づくり、評価をめぐる議論を通じてお互いを高める努力をしてきました。それは学問や研究を自己満足や勝手な遊び道具にしないための歯止めになり、成算あるものにしていきます。山口を去ることが決まったとき、下のような稚拙な歌を作って、自分の心境を託しましたが、ゼミ生に書道部の学生がいて、それを掛け軸にして送ってくれました。我が家の家宝にと考えて、床の間に掛けたりしていましたが、いつの間にかなくなっています。残念なことです。

秋雨の一日想う山口の八歳を越えし自立への道
たどり着き振りかえみれば峰々を越えては越えて来つるものかな

7. 立命館時代

さて、このことと前後して、京都の立命館に変わることになりました。朝日に改姓したこともあり、京都へ帰らなければならないと強く思うようになりましたが、なかなか思うに任せません。いくつかの話が出ては消えていきましたが、最後に立命の話が実現しました。当時、「絶命館」とも「落命館」とも揶揄され、幾人かの学会の大先輩からは「君には向かない」とか、「もっといいところがあるだろう」といわれましたし、立命の人にも「やめたほうがいいんじゃない」といわれたりしましたが、意を決して、1981年4月から移ることに決めました。そして、京都に戻ってから、上記の本をまとめ、教科書として編集した『現代世界経済論』を、そして奥田、向、鶴田の諸氏と共著で『多国籍銀行』をと、続けざまに成果を出すことになりました。特に多国籍銀行はその題名を冠した、我が国で最初の研究書で、大いに取り上げられ、そしてそれがきっかけで日本での多国籍銀行研究が進むようになりました。それ以外にもいくつか出しましたが、1980年代は私にとって、「黄金の80年代」ともいべき実り多き時代になりました。特にアメリカ貿易の実証分析から、日米貿易摩擦の解明へと進めたことは私の研究の新たな領域を開くことになりました。これは、当初日米貿易摩擦は単なる経済発展上の違いからくる摩擦、つまりは調整問題に過ぎないと理解していました。ところが、偶然デスラー（後にワシントンDCで彼の研究室を訪ねることになります）の本を読む機会があって、驚愕しました。日米間の政治上の問題でもあったからです。この地味な装丁の本は日本経済新聞社から出版されたものですが、細かな字の二段組みのもので、たいていの人が敬遠してしまうか、読み始めても、途中で断念しそうな代物ですが、私には極めて新鮮でした。そこには私の年来の関心事である日本の対米従属の一端が明確に示されていたからです。そこで経済過程の政治サイクル化を「政治経済論的アプローチ」というアイデアでまとめて、『一橋経済研究』からの依頼論文を書いたところ、色々のところから反応がきました。特に外務省の関係者に取

り上げられたことは、自説に確信を与え、それから機械振興協会や通産省の研究プロジェクトへの参加もあって、自動車問題を中心にしてアメリカ議会での議論やOTAのレポートなどを基に分析を重ね、『日米貿易摩擦と食糧問題』『日米通商摩擦の新展開』『競争力強化と対日通商戦略』という、日米貿易摩擦の政治経済学というコンセプトの下に3冊の本を出すことができました。政治経済学という方法は次第にそれ以外の所へも波及して、一大潮流になりましたが、私もそれによって、後に国際関係学部の開設とともに講義科目に「国際政治経済学」という科目を新設してもらい、学生にこの科目をしっかりと教えることが出来るようになったことは大変よかったと思います。学際的な学部における政治と経済との相互作用、相互転化の考えは大事なことなので、それを講義していくことは有意義です。

また、この研究を進めるにあたって私が重宝したのは、アメリカ議会、各省、ITC、GAO、OTA、USTRなどの政府機関の資料を発掘したり、利用したりすることが出来たことです。私は山口大学にいた頃から、アメリカンセンターの資料室に足繁く通い、その資料（特に議会資料で、そのためにCISカタログが大事なのですが、これで検索して、マイクロフィッシュから無制限だったコピーをとってきて、家に帰って読み込む）を利用してきましたが、京都に戻ってからは京都のセンターを活用しました。私がアメリカンセンターをもっとも活用した日本人（の一人）ではなかったかと、今でも密かに自負しています。私のいわば書斎、研究資料室のようなもので、だから大学の図書館はほとんど使わなくても済むくらいでした（後にアメリカンセンターとの資料の互換、協力を進めることにこぎつきましたが、残念なことに京都が閉館になってしまい、大阪に行かなければならなくなり、半ば立ち消えになりましたが、閉館の際には大量の図書を寄贈してくれることになったのですが、わたしが本当に欲しいCISは外に出せないからダメだと断られました。これがあれば、私は研究に困ることがないからです）。こうした資料の宝庫にアクセス出来たことは、その後ワシントンDCのアメリカンユニバーシティに留学するようになってからは、さらに議会図書館や前記の政府機関、さらには議会の公聴会、議員事務所、ロビイスト（業界の外郭団体）の資料、政府資料販売所（GPO）などにまで拡大していきましたが、いささかも戸惑うことなく、容易に入手することが出来ました。その意味では私のワシントン留学は資料上は実りの多いものでしたが、その資料の多くはまだ開封されずに我が家の書庫に眠っているような状態で、今度、何かの機会に再び研究テーマが設定できる時がきたら、日の目を見るようにしないともったいないと思っています。ついでに言えば、国連資料も大いに活用させてもらいました。そして関電会館から京都新聞にたらい回しにされて、厄介者扱いされていたこの国連寄託図書館を立命館に持ってくる事が出来たのは、大変よかったと思います。

その後、1980年代末から1990年代にかけては私の研究生活にとっての「失われた10年」で、行政に専念した時期でもあります。当時、もう二度と再び研究成果を出せないのではないかと

深刻に考えたこともありました。これには私自身の油断や多少の自惚れも災いしたように思われます。80年代の大量の成果刊行によって、人からは「もう出さないでいいよ」とか「これだけで十分だ」とかいう声が聞こえるようになり、それで安心したという部分があったと思います。そのため、少々成果がでなくてもまあいいやと安易に考える気持ちが私の中に芽生えたのでしょう。この油断と安易さが躓きとなり、その後私の研究生活上の深刻な悩みが生まれてきます。まわりでは次々と成果が出るようになり、はじめは忙しいからなどと勝手に理由付けしたり、慰めたり、あるいはもう出さなくても責められないだろうなどと言い訳していましたが、そのうちに本当に研究が出来なくなったのです。悩みは深刻でした。それにも拘わらず、行政上の仕事は多く、ついにはカナダまで行って教えなければならなくなりました。英語で教えること自体が大変な重荷ですが、何とか乗り越えて、それで1998年春にカナダから帰ってきました。カナダで教えた経験は私にとってよい経験になり、友人も増え、生活もエンジョイしましたが、なんとといっても、研究仲間がいないことが最大のネックです。それで、カナダから戻ったら、一念発起して研究に専念しようと固く決意しました（それで最初に読み上げた諸葛孔明の誡子書を座右の銘にしたのです）。これを突破できないなら自分の研究生活は終わりだとも決意したのです。しかし始めてみると簡単にはいきません。長年のブランクが固まっていて、頭が回らないのです。ともかく頭が固くなっているのを徐々にゆるめ、やめたくなるのをじっと我慢して、リハビリをするように、単調なことを繰り返しながら、毎日少しずつ前に進めることにしました。そのため、書齋も二階から下へ移し、ノートの取り方やこれまで確立してきた、長年にわたる自分流の研究システム全体を見直し、全面的に改めました。その結果、段々となれてきて、やがて研究成果を出せるようになり、それらを積み重ねて、内地留学の機会を得たのを活用して『現代多国籍企業のグローバル構造』を2002年に出すことが出来たときには正直ホットしました。これで俺も生きながらえたと実感できたからです。それから、共同研究書を3冊、単著を1冊出すことに成功しましたが、それはこの2002年までの5年間の苦闘があったからです。

1980年代は私にとって黄金時代であったが、1990年代は失われた10年であったといいましたが、それは研究面でのことであって、行政の仕事が負担になりすぎたとか、教育活動を軽視してよいとかという意味ではまったくありません。それどころか、行政の仕事が必要に応じて担うのは自治の観点から大事なことであり、また必要なことでもあり、横暴な小独裁者や気楽なフリーライダーを生まないための歯止めにもなります。また私が自治会活動や組合活動、あるいは学会などの世話役活動をやってきたのは、それらは他人に任せるのではなく、自分たち自身が担っていかなければならないことだと考えたからであって、別段、功利を求めたり、売名のためではありません。それが仲間意識を生み、連帯感を作るのであって、そのことは一緒に仕事をしていく上で極めて大事なことです。しかし学会でこそ最後に会長の仕事を務めまし

だが、それ以外はどの分野でも私の地位はいずれも地味で目立たない、いわば縁の下の力的なものばかりでした。だから、スポーツの世界にたとえれば、フットボールでいえばサイドラインか、野球でいえばベンチウオーマーかレギュラーの末席といったところですかね。しかし、それが大事だし、そうした自分の役割に満足すらしています。「けっして目立つな。そして汝の仕事を果たせ」。これが私の集団の中で生きていく際の哲学です。小野一一郎先生がいう「人民」そのものであれという教えです。ジョン・フォードの西部劇には必ず正義感の強い、義理人情に厚い、飲んだくれのアイルランド人が出てきますが（馱馬車の御者だったり、軍曹だったり、あるいは医者だったりの役で）、この飲んだくれのアイルランド人にジョン・フォードは自らを仮託し、アメリカのグラスルーツデモクラシーの根源をみているように思えてなりません。彼がハリウッドの赤狩りに抗して、セシル・B・デミルに面と向かって反論したという逸話を読むと、意外な感じもしますが、アメリカにおけるリベラルとはそういうものをいうのかと納得させられたことがあります。

また行政上の仕事を多く務めました。それはなるほどハードな仕事であったことは確かですが、そのために研究が出来なかったというつもりはありません。私個人は行政上の仕事が嫌いではありません。むしろ好きな方かも知れません。ただ、日常的な流れに沿って事務的に処理しているだけのことは退屈ですので、できるだけ効率的にしていく努力と共に、一定の方向性をもって展開することを望みます。いずれにせよ、こうした、思うに任せない苦境から私が得た教訓はbeing good in bad times（不遇な時ほど善行に励め）という言葉です。悪いとき、目のでないときは環境に負けずに、自棄（やけ）にならずに、じっと耐えて、時代が好転するのを待つということです。私は大学受験に失敗した後、いくら勉強しても成績が上がらないときがありました。すっかり落ち込んでいたのですが、その時、「目が出ないときがもっとも実力がついているときなんだから、腐らずに前を向いて進め」と忠告されたことがあります。以来、ことあるごとにこの言葉を反芻していたのですが、being good in bad timesという言葉（スーパーボールチャンピオンになったワシントン・レッドスキンズのヘッドコーチであるジョー・ギブスの本にある言葉）はそれに符合しています。いってみれば、みっともない生き方はするな、凜としている、ということでしょうか。

さらに教育活動に関していえば、これは大学教員としての私の生命線ですので、これまで一貫して力を入れ、また改善に工夫してきたつもりです。特に1990年代に入って、私の研究面での前進が止まったように感じられた時でも、教育活動はきちんとやるように心がけてきました。私は昔から予習をしないと講義が出来ない質（たち）で、「よい報告、よい講義をするには、よい準備が何よりも大切だ」というのが、第1の鉄則です。準備が出来ると気持ちに余裕が出来、とっさの応用が効くようになります。また学生の反応がわかるので、質問にも答えられる柔軟性ももてます。第2に過剰な準備をしないことです。若い頃には、自信がないので徹

夜で準備したりしましたが、その結果、何もかにも講義しなければという気持ちになってしまっていて強弱がつけられず、やたらと早口になったり、学生の反応を見ずに一方的にしゃべったりして、授業の効果がでないことがしばしばありました。準備のし過ぎに陥らないためには、はじめから90分の講義を細かく区切って、15分単位で6節にするといったことが有効です。そのため、この10年間ぐらいは1回ずつ必ず完結するように講義を組み立てています。第3に、どんなに忙しくしても、直前の15分を使って、講義のシュミレーションをしてみることです。今日はこういうテーマで、これとこれをこういう順序で講義するというのを、途中のバスの中で、反芻してみる事です。その点では講義開始の1時間前や30分前に控え室で準備のおさらいをしておくことを励行しています。いわばウオーミングアップでしょうか。この事前のシュミレーションは応用性があり、行政上の仕事をする際にも、どんなに忙しくても、たとえ15分でも今日の会議の議題、議論の要点、まとめどころなどについて予想しておいて、どこでまとめたか成功かを頭に置いておくと、その場で動揺しないで済みます。第4に、講義の後、必ずその記録をメモしておくことです。どこがよかったか、どこが不満足か、質問への回答はどうであったかなどをメモして、次に生かすようにします。そうすれば、間違った説明や不明瞭、不正確なものを次週に必ず訂正することが出来ます。このことを怠ると、間違いが広がり、試験での答案への正しい評価が出来なくなる恐れがあります。

アメリカは教育システムが発展しているところで、プラグマティズムという言葉も教育活動と結びついて出てきたものです。何かの折にアメリカで教育の心得に関して読んだことがあります。そうしたら、教師は学生の話をよく聞き、必要な指摘をおこない、一定の方向に導いていくこと、そして学生は先生に師事すること、時間を守ること、自らを高めるために努力することがあげられていました。それ以来、学生と教師のそれぞれの3則を私の教育の基本にし、また学生にもいっています。また、信頼 (trust)、敬意 (respect)、公平 (be fair) を基本としている人もいますが、これも大事な考えです。「学んで然る後、足らざるを知る」と、「教えて然る後、及ばざるを知る」という西園寺の額もありますが、私の3則はもっと単純です。そして教育活動を自分の生命線と考えたことは、結果的には私の研究を深めたと考えています。学生にわかりやすく、適切な言葉で、きちんと講義するためには、自分がしっかりと理解していないといけません。そのために、自分自身の理解度を検証することが出来ます。曖昧な理解のまま講義すると、必ず躓くし、質問もあります。それによって、自らが反省しなければならない気持ちになります。また学生からの思わぬ質問や指摘によって、不十分なところや誤解が判明します。もちろん、非がわれわれ側にあるとは限りません。学生側にあることも多いので、そのあたりのことは西園寺のいうとおり、相互的、双方向的なものです。

8. 永遠に閉じない円環

そこで、終わりが近づいたので、これまでの研究の総括を行うために、私の研究プランを示しておきましょう。私は国際経済学、現代世界経済を研究するにあたって、1 覇権国、2 対外援助、3 貿易、4 多国籍企業、5 多国籍銀行、6 国際通貨、7 軍事、8 総体、という大雑把なプランをかつて作りましたが、濃淡の違いはあれ、これまで5までのところを研究成果として出したこととなります。そして授業もこれを基に構成しています。ともかく、現代世界経済をトータルに掴むことを心がけているからです。しかし研究の進展はいくつかの重要な点でのプランの修正と変更を必要にしています。

まず第1は多国籍企業と多国籍銀行の結合を考えることです。このことは以前から考え、その一部を出してきましたが、私の多国籍企業研究が進んだ結果、企業内国際分業体制とともに、他方では企業間提携も進展してきており、その後者を考える際にはFPI（海外証券投資）や、FDIとFPIのクロス投資を考える必要があります。そのことから、国際生産の面ではなく、国際投資の問題、国際的な資本結合の問題を取り扱う必要があります。それを「多国籍金融コングロマリット」の解明として提起したいと考えています。ここには、サブパートとして（1）国際企業間提携の個別的で詳細な内容の追求、（2）知識資本とその果実としてのグッドウィル、そしてサービス経済化の内容の解明、（3）戦後の景気循環過程とその変遷、特にモノとサービスの関係の推移が入るだろうと考えています。

第2にグローバル経済の進行過程での「世界の工場」中国の出現が先進国、とりわけアメリカの知財立国との関係で突出するようになり、それをスーパーキャピタリズムと名付けました。それは現代では「世界の工場」中国をはじめ、モノ作りの拠点になる途上国が一種の「グローバル原蓄」を担う役割を果たしていると考えられます。私は原蓄が資本主義の発展に不可欠な役割を果たしてきたと考え、それを歴史的には本源的蓄積→産業資本の本来的蓄積→植民地原蓄→独占資本の蓄積→グローバル原蓄→スーパーキャピタリズムの蓄積という筋道で考えています。そこでこのグローバル原蓄を現代における世界経済の問題の一部として解明していきたいと考えています。

第3に日米貿易摩擦以来の日米関係の追求をもう一段深めて、全体としての政治経済関係として解明したいと考え、従来から「日米政治経済学」という課題を掲げてきたが、それをぜひ実現したい。特に、イラク派遣をめぐって日本の対米従属は一段と進んできているので、その本質に迫るためには、何としても象徴天皇制の意味と内容を明らかにしなければと考えています。それはまた今後の日本と世界の行方考える際にも大事です。

そして第4に未来社会への展望です。21世紀がどんな社会を目指すのか、世界はどうなるか、その理想はどうかなどに関してぜひとも発言しなければならない時がきているからです。ヒエ

ラルキー的でないフラットな組織，相互的で，転化し合う時代，インターディシプリナーとマルチディシプリナリーの違いと社会科学の総合化（政治経済学から社会経済学へ），企業，経営，人間の欲望とその充足，そして未来社会の見取り図など，私の未来論を作り上げたい。この中には平和と戦争の問題も入るでしょう。

最後に若干の謝辞を申し上げたいと思います。私は多くの先達から折に触れて貴重な助言と適切な指導を受け，また大いにご厚情をいただき，鼻厩にさせていただきました。これらの支援なしには今日の私はなかったと痛感しています。少し名前をあげさせていただくと，守屋典郎，木下悦二，深町郁弥，宮崎義一，佐藤定幸，奥村茂次，吉信肅，後藤靖，戸木田嘉久，小野一郎，南克巳，二瓶敏，井村喜代子，北原勇，林直道，一ノ瀬秀文，金田重喜，村岡俊三，尾上久雄，小島清，池本清などの諸先生方です。これらの先生方には一言では到底言い尽くせないほどの，研究上，あるいは行政に関わるご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。また内田讓吉先生は私と直接には一面識もないのに，私が初期に書いた『現代世界経済論』を激賞していただいたばかりでなく，立命館大学の校友会会長で，その発展に計り知れない貢献を果たされた南海電鉄社長川勝伝さんにご懇意にされ，そこでの定例の勉強会で，私のこの本をテキストにして何度か講義をされたとの手紙をいただき，その後，添え書きのついた詩集までいただきました。身に余る光栄だと感じています。その他に，多くの私の古くからの研究仲間，同僚，先輩，後輩の研究者の皆さんにも大変にお世話になりました。いちいち名前をあげませんが，この場を借りて厚く御礼申しあげます。いずれにせよ，私の研究生活はこれまで幸福だったと実感しています。

また，私は立命館大学ではおよそ卒業生500人，大学院生70名，博士号9名を出しました。それに山口大学時代の100名ほどを加えると，積み上げた数はかなりなものがあります。特に国際関係学部においては，第1回の卒業生以来，代々の学部卒業生の顔ぶれを見ていると，そのまま学部の発展の歴史でもあり，感無量なものがあります。私が大学院進学を強く勧めないこともあって，直接に大学院に行くよりはほとんどが社会へ出ていったのですが（したがって，院生は学部からの私のゼミ生はごくわずかです），社会のそれぞれの分野でしっかりした地歩を築き，歩んでいることは喜ばしいことです。基礎演習ゼミナール大会，オープンゼミナール大会，卒業論文の優秀賞，それぞれに我がゼミナール・クラスが奮闘し，確固たる地位を占め続けたのは，私の密かな誇りです。もちろん，私が指導したからではなく，彼らが優秀だったからです。多くの学生がゼミナールに来てくれたのも，ゼミの雰囲気がよく，彼ら先輩からの勧誘がよかったからでしょう。

さてインドでは一生を，学び－働き－遊びという，学→労→遊の順で進み，最後は人生をエンジョイした後，家族に看取られてひっそりと最後を引きとることが理想だと考える見方があるそうです。そしてごくごく一部の人のみが遊をやめて，社会のために自己を捨てて尽くす，

聖人の道を進むそうです（ガンジーのように）。それとの比較でいえば、私の場合は、それとは違って、最初に遊がきて、遅れて学に入ったので、学が終了しないうちに労を兼ねるということになりました。したがって、現在でも学と労が平行しており、当分は終了しそうな様子です。したがって、現役をまだ続けることになります。私は生きてる限りは現役だと考えており、聖人への道はおろか、人生をエンジョイすることも当分は出来そうにもない様子です。しかし「生きることは働くことだ」といったヴィスコンティの言葉を嘯みしめ、60を過ぎて「まだ学ぶぞ」と叫んだゴヤに見習って、六十にして立つ（六十而立）と柱に刻みつけました。まだ私の労も学も終わりません。上にあげた課題を達成するために、場所を変えて現役生活を続けたいと考えています。

学生諸君に残すことは、曇りなき目で全体を鳥瞰し、自分が本当に興味あることや課題や目標を見つけたら、それをしつこく追い回すことが大事です。途中で曲がり道をしようが、挫折しようが気にせず、持続性と一貫性を持って追い求めることです。そうしたら、いつか君たちの目の前に、突然、眺望が開けてくることがあるでしょう。「人生はとどのつまりは二つの言葉に集約される。待て、そして希望せよ」（エドモン・ダンテス＝モンテクリスト伯）。つまり展望を持って生きていこうということです。

私のモットーは以下の四つのDに集約されます。第1はDialectic（弁証法）、第2はDemocracy（民主主義）、第3はDetemination（決断すること）、そして第4にDirection（方向性をもつこと）です。この最終講義をするにあたって、私は映画『リバティ・バランスを撃った男』（ジョン・フォード）か『熊座の淡き星影』（ビスコンティ）か、または『猿の惑星』のように、あるいは漱石の『心』のように展開していこうと考えました。それは現実があって、それには謎があり、どうしてなのかというテーマ＝課題が提示され、それを解いていくと、また次の謎がでてき、それを再びテーマ＝課題として提示し、それをまた解くと、さらにそれ自体新しい謎になり、そしてテーマが提示され、こうして何度か解いていくと、それが最初のところへ帰っていき、なぜ、最初のことがあったのかがわかるという構成です。つまり、現在一過去一現在の旅を終えると、現在そのものが解き明かされるという構成を持ったもので、現存在一根拠一現実性、そして別のものへ、という論理的循環を描くことが私の考える弁証法の極意です。さて私の本日の講義をどう感じられましたか。冒頭で述べた「真実」を伝えられたか、それとも巧みな「伝説」（＝フィクション）の創造であったか、それは皆さんが判断してください。

幾歳も積み重ねたる講壇の塵振り払う今朝の別れか